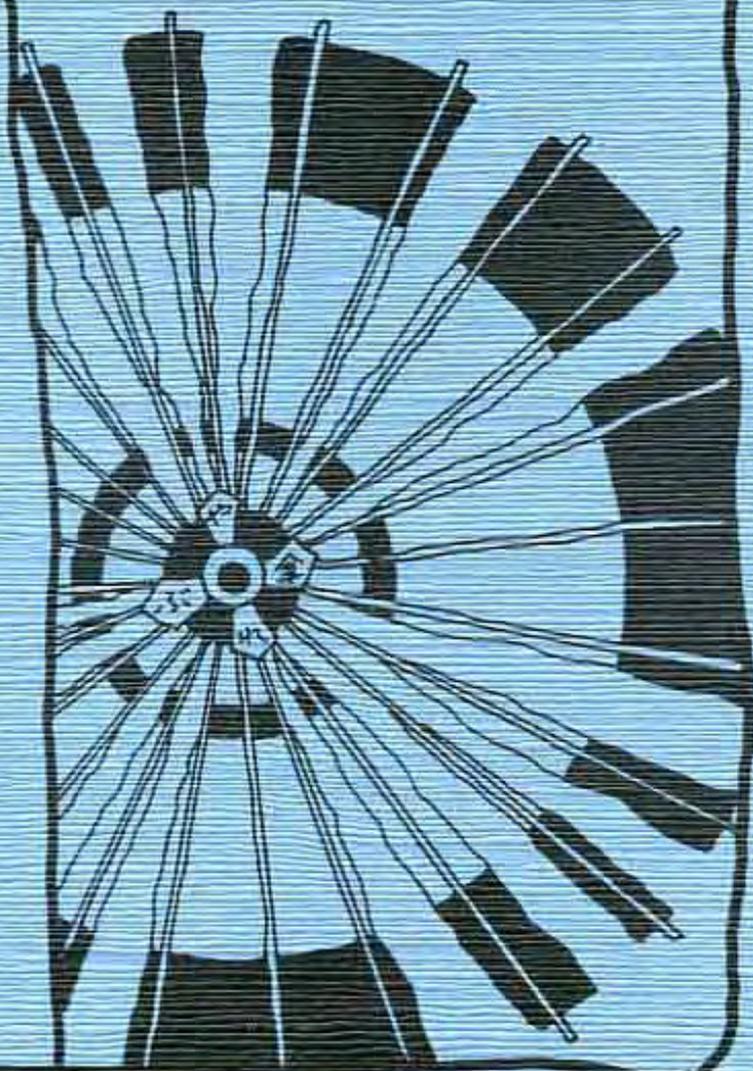


やぶれ傘



九十七号

二〇一七年八月

釣れさうな川にまた会ふ竹煮草	根橋安次
馬鈴薯の花猫車前のめり	大島英昭
金魚一匹外の空気を吸ひに浮く	きくちきみえ
リヌックより紐垂れてゐる日の盛り	丑久保 勲
片陰に立ちて銀座の待ち合はせ	廣瀬雅男
六畳に電気蚊取りの灯がひとつ	青谷小枝
左岸一面十葉の花の白	藤井美晴
バラソルを閉づる女の渡船客	白石正躬
何と無く旗に誘はれ心太	瀬島酒望
潮騒のふつと消えゆく藤寝椅子	安藤久美子
畦道に碑の広がり揚羽蝶	渡邊孝彦
終点に留まるバスや麦の秋	天野美登里
夏の風邪喉を伸ばして月を見る	小山陽子
唐寺の低き土塀や白牡丹	秋山信行
紅花の裏にあふるる蕎麦処	菊池洋子

抄 集 句 傘 れ ぶ や
選 夫 紀 崎 大

あやとりの橋が簾に夕端居	有賀昌子
坂登る緑蔭あれば休みつつ	松村光典
山開き同じ背文字の法被きて	安齋正藏
宵祭り屋台の裏に発電機	石塚清文
田仕事の田にゐて嬉しほととぎす	石原健二
電子音に返事して立つ夕薄曇	岩藤礼子
散骨は南風に揺られて羽田沖	奥田温子
電柱の片陰にゐてバスを待つ	黒澤次郎
金魚玉吊るす草加のせんべい屋	齋藤朋子
夏帽子にぎりつぶして声援す	高橋 均
浮子びくり動く刹那の糸蜻蛉	萩原溪人
県警の楽隊を見る木下開	萩原久代
席に着き小さく聲む夏帽子	武藤節子
どくだみを小瓶に挿してキツチンに	森 美佐子
梅雨満月赤々昇るピルの上	山本久枝

日 雷

大崎 紀夫

梅雨ぐもり賽の河原の先は海
炎昼の盥にポンプ井戸の水
砂のお城はパラソルのすぐそばに
旧川に亀浮いてゐる栗の花
夏ぐみは渋し山畑かわきゐて

かき氷向かひの影を猫が行き
駄菓子屋の日除に鉄の骨見えて
十階の窓より日雷の町
パリー祭もの干す紐にシート垂れ
炎昼の土手に積まれてゐる土囊
箱庭に転がつてゐる消防車
積まれたる塩化ビニール管灼けて

竹煮草

根橋宏次

夏落葉しばらく掃いてあとは暇
朝めしに呼ぶこゑ紫蘭咲いてゐる
片蔭にはたきかけつつ待つ車
らつきようの畑にくれば海見えて
浜木綿の花のきはまで網干され
かき揚げに蚕豆のあをありにけり
箱の釘揺すつて均す朝ぐもり
釣れさうな川にまた会ふ竹煮草
補虫網なにかと草に引つかかり
隣りよりへくそかづらのきてゐたる

向日葵

大島英昭

二時限がはじまつてゐる額の花
目まとひを連れて歩いてゐるやうな
ポンプ小屋ごとに電柱走り梅雨
馬鈴薯の花猫車前のめり
エアコンが効いてリハビリ室は午後
時間までバスは動かさず合歓の花
電気屋の横をがうがう梅雨の川
玄関に明日だす手紙五月やみ
にいにいが鳴き出してゐる砦跡
向日葵がごちやごちや咲いて空暮れて

金魚

きくちきみえ

音立てて膳に落ちたる枇杷の種
梅を干す香り座敷に通しけり
前をゆく仏滅の日の揚羽蝶
魚臭き餌に金魚の寄り来たる
ヒメムカシヨモギを先づは抜きにけり
雨雲に切れ目現はる栗の花
信号の青に雷鳴つづきをり
蚊遣り火に置き所あり一人寝る
ときとして人の消え去る螢狩り
金魚一匹外の空気を吸ひに浮く

日の盛り

丑久保勲

葉桜の並木を抜けて高島屋
離陸機はすぐ向きを変へ夏の雲
額の花向ひの家に嬰の声
カウンターの隅に空席夏暖簾
銭葵長屋門まで道ますぐ
軽トラの幌に木漏れ日梅雨晴れ間
近江かな車窓いつぱい夕焼け空
分針を五分進めて夏旅へ
リュックより紐垂れてゐる日の盛り
アグリッパの胸像窓に秋近し

片陰

廣瀬雅男

口三つ突き出てゐたり燕の巢
葉をつけて夏大根の売られけり
かるの子の羽ばたくやうな仕草かな
大木の下に昼寝の親子かな
片蔭に立ちて銀座の待ち合はせ
日焼けしてゐてぬるま湯の露天風呂
午後三時ちびっこプール終りけり
青柿の下に手押しの耕運機
曲りたる茄子を並べる無人店
木々の間を透けて日の来る花茗荷

ねむの花

青谷小枝

ねむの花朱印いたたく岩田帯
抱けば鳴く玩具の子猫梅雨晴れ間
鯔の子のピシピシ跳んで梅雨曇り
半夏生遺跡めきたる登り窯
新じやがのうす皮へろと剥き薄暮
降る雨と落つるしづくとえごの花
子供神輿いま豆腐屋の角まがる
料亭の跡の広くて額の花
夏霽の底は真昼の飲み屋街
六畳に電気蚊取りの灯がひとつ

牡丹

藤井美晴

左岸一面十葉の花の白
石楠花に雨降る坂を窯場まで
曲がるたび海見え隠れ桐の花
牡丹の崩れかけたる前に佇つ
側溝の底に常磐木落葉積む
梅雨雲に入りゆく夜間飛行の灯
梅雨晴れの空へ高枝切り鋏
噴水のしぶきがとどく花時計
帆の形に曳かれて行ける蟬の翅
岬端へ行くバスを待つ油照り

パラソル

白石正躬

新緑の下のベンチに背広置き
草揺らし川風のくる薄暑かな
梅の実の夜風に落つる音のして
昼顔の花咲く川のほとりかな
夏の陽を避けてたどれば山の墓地
散歩して灼けたる石に腰かけて
パラソルを閉づる女の渡船客
夏の日の木漏れ日は地にしつかりと
赤松の幹に陽のある夏の夕
夕焼けの褪せて川風来たりけり

心 太

瀬島酒望

タクシーは右折レーンへ走り梅雨
守衛所はペンキ塗り立て樟若葉
何と無く旗に誘はれ心太
昼寝覚暇ならと本渡さるる
廃線に残る鉄橋時鳥
樟脳の舟水盤の縁につき
かつて母住みし貸家に蟾蜍の声
古書市の日除けの傘に入りにつけり
二の鳥居までの寄り道かき氷
炎天のバス停前に保育園

立　　葵

安藤久美子

造り滝撫網に芥を掬ひゐる
緑蔭を抜けて図書館まで五分
立葵またたちあふひ洋館は
一房に青きバナナの混ざりゐる
朝曇り珈琲の香と砂時計
薄紅の岩塩を振る夏野菜
夏草のじゃれ合ふやうに揺れにけり
潮騒のふつと消えゆく籐寝椅子
法面を斜めに登る蟻の列
書を開く網戸の風のよき加減